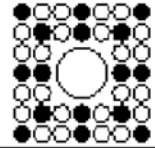


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 26

March 7, 2010



BCJA 奨学金 10 周年—会長就任のご挨拶—



BCJA 会長 横川信治

2月23日のBCJA委員会で齊藤友博前会長の後を受けて、この3月から会長に就任することになりました。非力ではありますが、精いっぱいこの大役に取り組んでいきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年度はBCJA奨学金が開始されてちょうど10年に当たります。1952年に第一回のBCスカラールが渡英して最初の50年間は、BCJAのメンバーが増え続け、メンバーは900名を数えました。イギリス留学がメンバーに与えた強い影響や、その後のご活躍は、1998年に出版された『BCJAの本』にまとめられています。現在、メンバー数は686名そのうち現住所を確認でき連絡を取れるのは600名です。

BCスカラシップ廃止後の2001年にBCJAのメンバーによってBCJAスカラシップが創設されました。現在までの9年間に奨学金への応募者は650人を超え、81名に奨学金が与えられました。奨学金に協賛していただいたメンバーは300名を超え、寄付総額は1300万円を超えています。40数名のメンバーからは毎年のように協賛金を頂いています。

奨学金開始当初から、応募者の質が非常に高いことが話題になっています。その要因はいろいろ考えられますが、British Council公認の奨学金であること、学術・芸術の多分野にわたること、他の奨学金との併用が可能であることなどが大きな要因ではないかと考えられます。幅広い専門の選考委員の存在も大きな強みで、多くの優秀な応募者から素晴らしい奨学生が選ばれています。

Newsletterに掲載されたBCJAスカラールの報告は、2002年の17号から2010年の26号までに48を数えました。奨学生のレポートを読んで感じたことは、この奨学金が非常に大きな精神的支えになっていることです。特に、仕事を辞めて留学する場合に、自分のやろうとしていることが認知されたということは、非常に大きな支えになっています。博士課程やその他の次のステップに進む場合には、BC公認のスカラシップを得ていることは、非常に大きな強みになっています。調査や学会出席のための研究費としても、有効に使われています。これら

の点は、この奨学金が15万円という金額以上に、奨学生にとって重要な意味を持つことを意味しています。全てのレポートから強い感謝の気持ちが伝わってきます。皆様の寄付が頼りですので、本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

今年度は、秋の総会をBCJA奨学金10周年記念集会としたいと考えています。講演および奨学生の報告会の後に懇親会を行います。この10年間の成果を直接お確かめください。具体的な計画が決まり次第ホームページに掲載します。多くの皆様の参加をお待ちしています。

(Nobuharu Yokokawa, 武蔵大学経済学部教授、Queens' College, University of Cambridge, 1977-81)

BCJA 会長退任にあたって

—この2年間で振り返る—



前BCJA会長 齋藤 友博

2年前に会長に選出され、BCJAの活動の活発化はともかく、衰退させないためには何をしたらいいのかに心を砕きました。グループメールを中心とする会員相互連絡ネットの構築、加えて年数回の非公式な仕事帰りにふらっと立ち寄れる気軽な集まりを開催すること、この2つをこの2年間の課題として胸に刻んだのですが、役員間のメール活用は軌道に乗ったものの、それらの実現が果たせなかったことが心残りです。

異業種交流会やメルマガ、ブログ、SNS、そしてツイッターと、さまざまな分野の人との邂逅と交流は実に盛んになり、もはやBCJAに期待するものは減りつつあるようにも見えます。しかし、BCJA奨学金に浄財をお寄せくださる寄附者のご芳名を眺めてみますと、顔を合わせることはなくとも、あらためて会員の方々のBCJAへの熱い想いが伝わり、多岐に渡る豊富な人材を擁するBCJAの存在の意義を痛感します。

新会長のもと、あえて前途多難と形容しますが、BCJAの会の継続と発展、特にますます要望と期待の高まっているBCJA奨学金の維持と充実を願います。そのためになさねばならないことも多々あると思いますが、役員としてさらに1年お手伝いさせていただくことが、残された責務とっております。

最後に、至らない私を支えBCJA事務局として運営の多くを

担ってくださった川崎様始め、役員、会員皆様のご支援とご協力に深甚なる感謝を申し上げますとともに、今後も BCJA の活動にご加勢くださいますようお願い申し上げます。

2009 年度英国留学奨学金審査委員会ご報告

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

2001 年から始まりました BCJA 英国留学奨学金も今回で9回目を迎えます。本年度も、昨年に引き続き 8 名の方々に奨学金を差し上げることが出来ました。奨学金をご寄付いただきました BCJA 会員の皆様方、審査を担当されました委員の先生方に、心からお礼を申し上げます。

本年度の応募者は総数 43 名、内他の奨学金が決定したとの理由で辞退された方が 1 名でした。本奨学金の応募者は、最近非常に質が高い点が評判となって居ますが、今年度もこの傾向は維持されました。応募者の分野は、英文学、医学、歴史学から、国際関係、デザイン、音楽学と広範囲に及んで居り、研究や大学院レベルでの英国留学で、動機や計画が明確な方々を選考するようにつとめました。

今後も、BCJA 奨学金は、BCJA 会員の善意の寄付により運営を続けることになって居りますので、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

2009 年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属／出身校
草薙	佳奈子	Institute of Education, Univ of London	教育学	Univ of North Carolina, Chapel Hill
井上	千尋	Lancaster University	英語学	東京外国語大学
戸塚	麻友子	LSE	環境開発	Univ of California, Berkeley
杉浦	寛奈	London School of Hygiene and Tropical Medicine	精神分析学	東京女子医科大学
岡田	卓也	LSE	国際関係	明治大学
熊丸	耕志	Loughborough University	環境水工学	岡山大学
中嶋	剛	Institute of Neurology, University College, London	脳神経外科	秋田大学・東京女子医科大学
名越	正貴	SOAS, University of London	国際関係・外交	東京外国語大学

2009 年度 BCJA 年次総会について

11 月 25 日 18 時から東海大学交友会館で開催され、以下のような活動報告と議事が行われました。British Council 代表の Jason James 氏、参議院議長の江田五月氏よりご挨拶をいただきました。これまでの BCJA 奨学生の中から 2005 年度の斉木臣二氏が出席されました。

- (1) 会長報告:年 3 回の役員会開催。グループメールでの月数十回の連絡、意見交換。数回の British Council 代表との意見交換と懇談。
- (2) BCJA 奨学金報告:別項参照。
- (3) ニュースレター発行:別項参照。
- (4) 会計報告と承認:別項参照。
- (5) 次期役員承認:白鳥令、青柳昌宏、齋藤友博、池島大策、島津幸男、横川信治(敬称略、順不同)。なお、新役員会の推薦で数人補充することが承認された。
- (6) 次年度申し送り事項:名簿の整理、BCJA 奨学生の入会促進、入会および会員資格の規約改正、BCJA 奨学金の継続、グループメールの整備と活用、British Council と BCJA のホームページ間のリンク、年次幹事の新設、British Council との連携促進、事務局の確保、年会費徴収の検討。
- (7) 総会議事録のニュースレターでの掲載。

なお、総会についてご質問ご意見がございましたら yhytst2005@yahoo.co.jp までお寄せください。



参加者による記念撮影

2003 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

能を通じてのロンドン留学生活

青木 涼子

2003 年度 BCJA 奨学生という形でイギリス留学を支援していただいた BCJA の皆様に厚く御礼申し上げます。ここでは、皆様に私のロンドンでの留学生活についてご報告をいたします。

1. 留学までの経緯

私は東京芸術大学音楽学部にて能楽(観世流シテ方専攻)を学士、修士と学び、2002年より引き続き博士課程にて学んでいました。そうした私がなぜイギリス留学をと謎に思われると思いますが、能楽の社会では、いまだに家制度が堅固であり、また女性があまり活躍しにくいという現状があります。東京芸大の能楽専攻では、もちろん希望者は学べるものの、同学年は能楽師の家の子それも男子ばかりという状況でした。修士論文にて「女性と能」というテーマで執筆し、その研究テーマをもう少し掘り下げたいと考えていた私は、思い切ってイギリスに留学しようと考えたのです。能楽を持って世界で勝負してみたいという気持ちもありました。能楽という歴史ある伝統芸能をと考えた場合、やはりアメリカではなく演劇の歴史があるイギリスだろうと思い、希望校を探しはじめました。

2. School of Oriental and African Studies (SOAS) 東洋アフリカ学院について

ロンドン大学はラッセルスクエアという文教地区にいくつか点在しており、SOAS(東洋アフリカ学院)は大英博物館の裏手という大変恵まれた環境にあります。名前からもおわかりのように、地域研究を専門とする大学で、ジャパンリサーチセンターというヨーロッパでは一番大きな日本専門の研究機関もあるところ。そこを選んだ理由は、先生方が日本研究のエキスパート揃いであるということ、日本の研究者との交流が多いこと、図書館が大変充実していることです。能楽の資料に関しては、東京芸大の図書館より揃っているのではと感じます。月刊誌なども毎月入ってきますし、大変研究しやすい環境にあります。

3. 留学中の活動状況

私は2003年9月より渡英し、まずはSOASのFDPSコースに入学しました。その際にBCJA奨学金が大変役に立ちました。このコースでは主に大学院に進むための準備コースで、毎日6時間の授業をこなしました。主に英語の勉強ですが、二つの科目も選べ、European SocietyとCultural Studiesを専攻しました。年に3回のエッセイと、終わりに1万ワードの論文と学期末試験が課せられ、その成績次第で次に入学できるかどうか決まるというコースでした。東京芸大では常に実技ばかり行っていた私には、高校時代の受験勉強に戻ったような大変ハードな毎日でした。無事2004年9月にコースが終了し、SOASの博士課程に入学できました。2005年にはMPhilを通過し、PhDコースに進み、引き続きのテーマ「女性と能楽」を研究しています。

4. 能を通じての国際交流

留学してすぐに、SOASには能クラブがあることがわかり、そこで教えてほしいと頼まれ、教え始めました。生徒は10名ほどで、SOASの生徒ばかりでなく外部からの人もおり、イギリス人、日本人、いろんな国籍の人がいました。夏にはSOASが主催するワールドミュージックサマーコースというのがあり、そこでも講師をつとめました。それに関して3回ほど新聞で取り上げられたりしました。またそこでの評判を聞きつけ、イングランド東部にあるHull大学からもワークショップの依頼があり、演劇学部の生徒たちを教えました。



その間、公演活動としては、2004年4月にニューヨーク、2006年3月にロンドンにてシェイクスピアのマクベスを題材とし、能とオペラを融合したN-OPERA Macbeth公演にて主役を演じました。特にロンドン公演ではプロデュースも手がけ、後援、協賛、助成を自分で集め、なんとか公演にこぎ着けました。

現在では、特に現代音楽の作曲家と共同制作を行っており、2009年2月にベルリン高等研究所にて世界的に有名な作曲家の細川俊夫氏の作品を上演しました。2010年2月には、20世紀を代表する作曲家の一人であるヤニス・クセナキスがテーマのクセナキス・フェスティバルに日本人でただ一人召喚され、ニューヨークにて公演を行う予定です。



今年是指導教官が1年間サバティカルにて京都の立命館大学にて研究活動を行っているため、私も彼の指導を受けるため、現在日本で博士論文の執筆を行っており、まもなく博士論文を提出するところです。

このような有意義な活動を行えているのも、BCJAの皆様のお陰と深く感謝申し上げます。

(2003年度BCJA奨学生、School of Oriental and African Studies, Noh theater Women and theater)

青木涼子公式ホームページ <http://ryokoaoaki.net/>

吉田 林

1. 研究について

私は2005年6月にシェフィールド大学で念願の生物医学の博士号を取得することができました。博士号取得に必要な実験結果は既に得ていたのですが、この結果を学術雑誌に発表するにはあと少し実験を付加する必要があります。イギリスの自然科学系の博士課程では給料をもらって研究活動を行います。課程の終了に伴い、私の給料も終わってしまい、私費で研究を続けなければならなくなりました。そんな時にBCJA 奨学金の存在を知り、少しでも研究生活の助けになればと思って応募したのです。

私の研究は細胞接着因子 TAG-1 の変異が小脳の発生にどのような変化をもたらすかを解明することでした。私がこのテーマを選んだ理由は、病気を治すためには細胞連絡の土台となる細胞接着に目を向ける必要があると思ったからです。中でも私は脳神経系の病気に大変興味がありました。

小脳で一番多く存在する細胞は顆粒細胞という小さな細胞です。この細胞は図1に示すように小脳表層で分裂増殖(A)、分化し(B)、更に移動して(C)、最終的に小脳深部に落ち着きます(D)。細胞接着因子 TAG-1 はこの(B)部分に強く発現している蛋白です。成人の小脳ではこの顆粒細胞はほぼ全て表層部から移動し終わっています(図2a)。ところがTAG-1 変異型の小脳では、これらの細胞が塊となって表層部に残っている姿が見られるのです(図2b)。私の博士論文ではこの細胞の(B)から(C)への移動が TAG-1 変異型では遅れていることを示し、細胞接着因子である TAG-1 が細胞移動にも関わることを示しました。

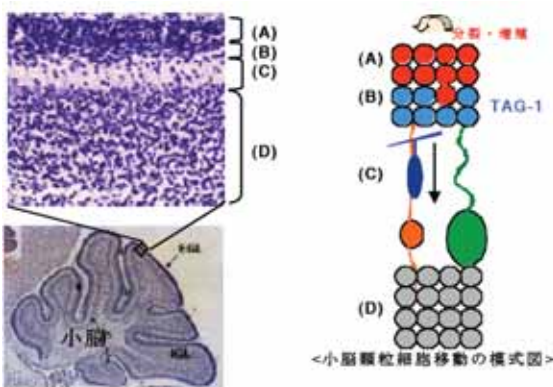


図1 小脳顆粒細胞の移動

顆粒細胞は小脳表層部(A)で分裂増殖後、(B)に移動して分化し(この時に突起を伸ばす)、他の細胞の突起をつたって(C)部を更に移動、最終的に小脳深部(D)に到る。

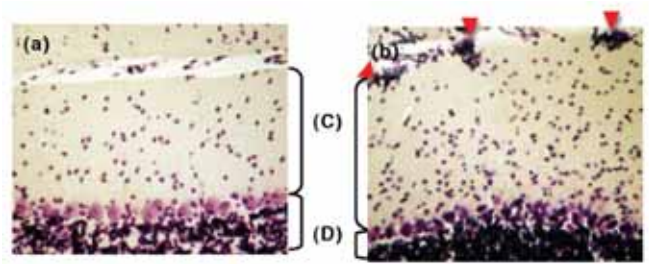


図2 野生型(a)と TAG-1 変異型(b)の小脳

- (a) 通常、成人の小脳は(A)(B)の顆粒細胞がほぼ全て(D)に移動するため(C)(D)の層しか残らない。
- (b) TAG-1 変異型では、移動できない顆粒細胞が塊となって表層部に取り残されている (矢頭)。

それでは何故細胞移動が遅れるのか。TAG-1 を失った(B)の部分で、顆粒細胞は分化に問題が生じているからではないのか。これを証明することが私が付け加えたい実験でした。幸い BCJA 奨学金を受け取ることができ、私は喜んで実験に励むことができました。

私は顆粒細胞を培養系に取り出し、分化を示す尺度となる突起の伸びを調べてみました。結果は予想通り、TAG-1 変異型の顆粒細胞は突起を伸ばしあぐねている、つまり分化しにくくなっているのです。変異型では(B)の分化が遅れるから、(C)の移動に移れないのでしょう。私の研究は複数の研究員に受け継がれ、より大きな研究成果が導き出されることとなりました。これら全ての結果は近く、学術雑誌に発表される予定です。私の異国での研究生活を支えてくださった BCJA に心から感謝する次第です。

2. シェフィールドでの生活

シェフィールドはロンドンから電車で北へ 2 時間半、マンチェスターから東へ 1 時間のイギリス北部、南ヨークシャー州に位置します。人口ではイギリス第 4 の都市ですが、車で 10 分走れば自然豊かな郊外に出ることなどから大きな田舎町といった感じがします。住宅地ではキツネ、フクロウ、ハリネズミ、リスなど、日本の都市ではあまり、あるいは全く出会えない動物達が闊歩しています。特にすぐそばにあるピーク・ディストリクトという巨大な国立公園は四季折々に美しく、見る者の心を癒してくれます(図3)。

シェフィールドの人々はとても難しい訛りのある言葉をしゃべります。これは来た当初、講義が分からない、コミュニケーションがとれないといった大変な問題となりました。よくあれだけ分からなくて大学院を卒業できたものだとも自分でも感じています。

そんな私の助けになったのは、ここの人々がとても優しく、英語のしゃべれない者に対しても大変理解があるということでした。日本人だからといって差別や区別をされていると感じたことは一度もありません。これは長く多国籍の人々が混在してきたこの国の成長の結果なのでしょう。

日本と比べてイギリスの給料はとても低いです。そしてまたイギリスの仕事のテンポは全体的にとってもゆっくりしています。

大学では労働者は昼御飯1時間のほかに午前中30分午後30分のお茶タイムがあり、5時には仕事をやめて帰ります。実験に時間がかかる研究職の人々でも、多くは5時から6時くらいまでの間に帰っていきます。それにも拘らず良い研究がどんどん出てくるのですから不思議です。実際、人々は「仕事は時間より効率が大事」と考えているようで、アフター5の自分の時間(又は家族の時間)をととても大切にしています。これは働き過ぎの日本人がこれから見習っていかねばならない所だと感じました。



図3 ピーク・ディストリクト国立公園

シェフィールド大学生物科学科で特筆すべきことは、まず女性のボスが半数以上を占めるということです。また研究室どうしのコミュニケーションが盛んで、共有の実験機材も多く、試薬の貸し借りも頻繁に行われます。これらのことが全てうまく作用してとても良い環境を作り出しています。大学内に日本人は少ないですが、東アジア研究所・日本学コースがあることから、日本に提携大学があり、毎年決まった時期に日本人学生が語学留学に来ています。

イギリス人のアジア文化に対する関心は高いようです。私の知っている限りでも、街には2つの仏教センターがありますし、瞑想、ヨガ、太極拳等を心身の健康のために取り入れる人々が多いです。また園芸が盛んなことから、日本の庭園に関する関心も高いです。私はこれらアジア文化の良さをこちらに来てから再発見させられました。実際、仏教や庭園などについてよく聞かれるのですが、たいていの場合は答えることができず、恥ずかしい思いばかりしていました。自国の文化をもっと良く知っておくべきだったと反省しています。

趣味においてはこの国の特徴的なことを体験したいと思い、まずシェフィールド大学のリサイクリング・コーディネーターになってみました。プラスチックやビンなどの回収、省エネ等の環境保護活動を学部学科ごとに推進し、定期的に全学で集ま

って既存システムの有効活用と改善を協議します。シェフィールド大学はこの取り組みが評価され、シェフィールド事業表彰委員会から環境賞を受けました。私はこのような活動の一端を担わせていただけたことを嬉しく思っています。学外ではThe BESOM in Sheffieldというチャリティー団体でボランティアをしました。イギリスはチャリティー王国ですが、その中でBESOMは中古で良質の服、家具、電化製品などを集めて貧しい人々(ホームレス・病人・難民など)に給付しています。また必要に応じて日曜大工や造園なども手伝います。私はこれらのチャリティー活動から多くを学びました。日本の若い人達にもどんどんこういった「人(特に弱者)」に接する経験をしてもらい、他人の痛みの分かる人間になって欲しいと思います。

日本とイギリスは大陸の傍らにある気候の穏やかな島国という点だけでなく、貧しい国々に囲まれているという点でも共通しています。ヨーロッパはEU加盟国でも未だ豊かでない国がありますし、東欧、ロシア、南にはアフリカ大陸があります。日本は北にロシア、南に東南アジア諸国があります。私の後輩に対するアドバイスは、日本人として、またアジア人としてのアイデンティティーをしっかりと持ってこの国に来てもらいたいということです。イギリスにはそのような人々を尊敬を持って受け入れてくれる土壌があります。

最後に、このように多くを考え、学ぶ機会を与えてくださったBCJAに感謝すると共に、更なる充実と発展、後進の育成を願って筆を置きます。

(2005年度BCJA奨学生、University of Scheffield, 生物医学)

2007年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告 英国で医療政策を学ぶ

富塚 太郎

私は、BCJA英国留学奨学金にご支援頂き、2007年10月から1年間、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院と経済政治学大学院の合同プログラムである医療政策・計画・財政学修士課程にて学ばせて頂きました。自分にとってそれまでの地域医療の臨床から離れ、医療政策の研究を深めるにあたり、BCJA英国留学奨学金は私の背中を押してくれた本当に貴重なご支援でした。有り難うございました。

「英国で医療政策を学ぶ」と聞くと、日本でも最近話題になります英国の国民医療サービス(National Health Service: NHS)のことを思い浮かべるかもしれません。しかし本修士課程は、「英国の」医療政策だけではなく、ヨーロッパを中心としながら先進国・低・中所得国・各国の医療政策を理論的・実証的に学ぶというものでした。想定しているのは国際機関のジュニアレベルの知識・能力で、私のクラスメイトは現在、世界銀行やGlobal Fund、各国の保健省・NHSなどにて活躍しています。またコースの特徴として、公衆衛生大学院での授業と社会科学系大学院での授業を受講でき、両校の教授陣、英国最大級の図書館を含めた複数の施設を利用できることがあげられま

す。といいながら、徒歩で 20 分程度離れたふたつの大学を1 日何度も往復するのは結構大変でしたが、その通学途中にある大英博物館を通学路にして、時空を超える環境で常に刺激を受け、学習・研究を楽しむことができました。

授業は Julian Le Grand や Elias Mossialos をはじめとする、英国を含めた世界各国の政権へのコンサルティングと研究に秀でたスタッフによるものですが、医療政策・医療経済や意思決定・組織行動ほか初歩から丁寧に積み重ね議論していくスタイルで、初学者に対する課外授業もあり、私は大いに助けられました。修士論文のテーマには、医療における規制を取り上げ、英国医師免許更新制度をケースとして、政策分析を行いました。英国では 2009 年から医師免許更新制度を導入することが決定しましたが、その導入に関する根拠、政策形成過程や実施内容に関しては未だ議論があります。この政策決定以前にも、General Practitioner を含む各専門医学会による認定制度やその定期的更新と毎年の他者評価が行なわれており、更に追加して医師免許の更新手続きを踏むことには、特に医師集団側から継続的な疑問が提示されています。私はこの論文にて、英国(イングランド)の医師免許更新制度政策形成の過程とその根拠に関する政府資料・学術論文・新聞雑誌・ディスカッションペーパー等をレビューし、特にアジェンダ設定とその政策形成過程分析を行いました。医師免許更新は多くの国で政策的議論に頻繁に挙がるものの実施にいたることは多くありませんが、英国では 1990 年代に General Practitioner であった Harold Shipman による連続殺人や Bristol 小児病院心臓外科における悪診療などが公にされ、それに対する訴訟や政府による特別調査委員会など推奨が明確な機会となり、医師免許更新の実施が決定的となりました。医師免許発行・管理機関である General Medical Council がパイロット試験にて免許更新に関する評価方法の表面的妥当性を確認し、2002 年の Medical Act の改定を行い準備が整った中、2005 年からの免許更新制度実施が延期になったのは、先にあげた特別調査委員会からの免許更新制度実施内容に関する疑義、特に医師主導の専門医認定制度と医師免許更新制度の関係に対する疑義でした。「患者の安全の確保と医師の診療への適性」の 2 点を確保するためのより客観的明示的な判断を実施する機関とそのシステムの形成に、より外部、特に市民の参加が求められました。

結局、よりハードな規制を既存の認定・再認定に加えて新たに実施する根拠には乏しいが、政府・専門家の説明責任と安全・質への責任を果たすという点で免許更新制度が実施されることは、政治的判断として支持される。しかし 7000 万ポンドの追加投資で行なわれるこの政策の効果・負の影響こそが増分費用効果を含めた客観的評価の対象となる、と私は結論しました。

最後に、この留学を支えてくれた妻に感謝したいと思います。この留学期間中に長女に恵まれ、その出産をロンドンですという決断を妻が勇気と好奇心を持ってしてくれたお陰で、私は机上の医療政策だけでなく、実際の英国医療制度をたつぷりと経験することができました。妊婦検診やエコーを含めた検査、両親学級や出産・入院、保健師の自宅訪問や地域の育児支援プログラムに勉強時間をやりくりしながら参加することで、知識の間を埋める学びをたくさん経験できました。感情を伴った

学びはより記憶の定着と理解を促進するといいますが、妻の協力は間違いなくこの点でこの留学を充実したものにしてくれました。もちろん嬉しさと楽しさに溢れた学びでした。またこの留学にご支援頂いた皆さまにも心から感謝しております。有り難うございました。

(2007 年度 BCJA 奨学生, London School of Hygiene & Tropical Medicine, London School of Economics & Political Science, 医療政策・計画・財政学)

2008 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1] ブリストルより

安部 静佳

まず初めに、2008 年度 BCJA 奨学生という形で英国留学を支援して下さいました BCJA の皆様に厚く御礼申し上げます。

1. 研究の内容 ～超高齢社会日本を海外の視点で～

私は 2008 年 9 月より University of Bristol の Centre for East Asian Studies の博士課程で日本の高齢者の現状について研究を始めました。現在、日本は世界で最もお年寄りの多い国です。この社会の高齢化は、日本だけでなく、今後も引き続き世界全体で見られる傾向です。このいわば、世界最先端に位置する日本の社会、高齢者を対象に、彼らが退職をした後、どのように家族や社会とコミュニケーションをとり生活しているのか、とくに、そのために、どのように情報通信機器を使い便益を得ているのかを調査する予定です。

なぜ海外で日本のことを研究するのか。これは、イギリスで尋ねられることはあまりないのですが、日本ではよくなされる質問です。本来、日本のことを日本的な価値観に沿って研究するということが王道であり、また、とても大切なことなのを言うまでもありません。しかし、日本の現状を違った視点から再検討することによって、これまで当たり前とってきたことが、そうではなかったり、解決が困難と思われていた問題に関しても意外にヒントが見つかったりする場合があります。他方で、他国の視点から日本の現状を整理することによって他国の研究者と対話することが容易になる、というところにも他国で自国を研究する面白さがあると思います。

2. Centre for East Asian Studies について ～研究所からフィールドへ～

私が所属する Centre for East Asian Studies は、Faculty of Social Science and Law に連なる研究所の一つです。現在、大学院生のおよそ半数がイギリス人、残りが留学生という構成です。ただ、英国政府が中国研究を奨励している影響で、ほとんどの学生が中国研究を専攻しています。本研究所には、バックグラウンドの異なる人々が集まるので、はじめの 1 年は、Research Training と称して、Qualitative Social Research と Quantitative Social Research、そして Philosophy of Social Science をはじめとする授業を履修し、単位を取得します。それと並行して博士論文の研究計画書を煮詰め、viva と呼ばれる

口頭試問に臨み、それをクリアした後、研究に専念することができるようになります。

センターでの共通語は当然、英語ですが、所属する大学院生はそれぞれアジアの言語を一つ以上マスターしなければなりません。アジアからの留学生のほとんどは自国の言葉を使えるので、語学研修は必要ありませんが、それ以外の学生のほとんどは、それぞれ約1年程度、中国語なら中国、日本語なら日本と語学の勉強のためにその国の大学へ留学します。また、イギリスでアジア研究を行うため、ほとんどの学生は、フィールドワークのために対象国に一定期間滞在します。そのため、はじめの1年は大学でトレーニングを受け、2年目からはアジアの言語を使える学生はフィールドへ、それ以外の学生は語学研修へとイギリスを離れることとなります。語学研修を修了した学生は、その後フィールドワークに入るので、約2年間対象国へ滞在することとなります。そしてそれぞれの最終年には再び大学へ戻り、博士論文を書き上げるというのが基本的な流れです。

3. 生活一般 ～多彩な仲間との共同生活～

ブリストルでは、私は、ブリストル大学の大学院生に割り当てられた建物の1つに住んでいます。大学より徒歩およそ10分、市内中心部に位置し、1つの建物に200名以上の学生が住んでいます。私が住んでいるフラットでは、一人ひとりが en suite と呼ばれる、シャワー・トイレ付の部屋を持ち、キッチンとリビングルームを、私を含む4人のフラットメイトで共有しています。この建物には、studio と呼ばれる、日本で言うワンルームマンションの形式の部屋から、キッチン・リビング・シャワーを7～8人で共有する大きなフラット、女性のみ、男性のみ、混在のフラットと、できる限りそれぞれの希望に沿ういろいろなフラットが用意されています。

イギリスの大学の特徴の一つであると思いますが、学生は非常にインターナショナルで、特にこのような大学院生用の建物となると、勝手の分からない留学生が多くなり、学期中の忙しい時期を除けば、常にどこかのフラットで食事会があり、それぞれが自国の料理を披露しながら、大きな家族のように生活しています。皆、専攻もバックグラウンドも年齢も違いますが、不慣れな環境で学位取得に向けて勉強するという点では同じ。学期中の忙しい時期には、建物全体が大きな勉強部屋にでもなったかのように静かに、皆、集中して勉強します。単身渡英した私にとって、この生活環境がどれほど支えになっているか図り知れません。

4. 余暇の過ごし方 ～5ポンドでヨーロッパへ～

ヨーロッパには、格安航空券を販売する航空会社があり、運がよければ、5ポンドで、例えば、イギリス・ドイツ間を飛行することも可能です。となると、長期休暇中は、旅行をする学生が多く、安くて、設備の整ったユースホステルを利用したり、友人の家に遊びに行ったりしながら、大学で学ぶのとはまた違った方法で、異なる文化を経験することができ、非常に充実した余暇を手軽に過ごすことができます。ブリストルにおいても、まず、街自体にイベントが多く、それに加えて、それぞれの学部やインターナショナルオフィス、教会などが定期的にイベントを催してくれるので、希望すれば、いくらでも人とコミュニケーション

をもち、生活を楽しむことができます。

私はこの先も引き続き博士課程で研究を続けていきますが、改めまして、留学に際して BCJA のご支援を頂いたことが非常に大きな励みになったということに感謝しております。ありがとうございました。

(2008年度 BCJA 奨学生, University of Bristol, East Asian Studies)

2008年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[2]

英国オックスフォード MBA 留学記

石田 泰博

まず何より第一に、感謝の意をお伝えしたいと思います。私費休職という形で1年間、自分の身を世界50カ国から集結した経営学修士(MBA: Master of Business Administration)を目指すクラスメイトに囲まれ勉学に勤しみ、無事に卒業できたことは、BCJAによるサポートなしでは語れないことだと思います。それは経済的なサポートという側面だけでなく、目には見えない自信、つまりBCJAが認めてくれ後押ししてくれているのだという自負、そしてしっかりと目標達成をしなければならないという責務感、これがオックスフォード大学経営大学院(ビジネススクール)留学期間中、心の中で支え続けてくれたと思います。その結果、歴史と伝統、そして気品と気質を大切にしているイギリスにて20代のうちに自分を曝け出し、大切な本質を吸収することが出来たのではないかと確信しています。改めて感謝申し上げます、本当にありがとうございます。



◆ 不思議な街オックスフォード

オックスフォード。ロンドンから鉄道で1時間、ヒースロー空港から90分と大変便利な立地であるにも関わらず、大都市の影響を受けずにひっそりと泰然自若として優雅に佇んでいるこの街は、歩いているだけで不思議な感覚に誘われ、ガーゴイルたちが上から見下ろす通りを歩けば、subfusc と呼ばれる伝統的なオックスフォード大学のドレスに身を包む学生たちとすれ違い、歴史上の人物が通いつめたパブでクラスメイトと話に花を咲かせているとふと時間が止まったかのような錯角に陥る、そんなストーリー溢れる中世そのままの街であります。

観光客で賑う夏空、色づく木々が落ち着いた雰囲気を醸し出す秋、大雪に包まれた白きオックスフォードの姿、花々が咲

き誇り緑が街を覆い始めた春、そしてまた広く遠く青空の夏へ。ビジネススクールに通いながらもオックスフォード大学の1カレッジに所属し、衣食住を他の学生たちと共にします。自分は St Edmund Hall に所属しアコモデーションもカレッジのフラットに間借りをしました。数々のフォーマルディナー、特有のガウンと蝶ネクタイを纏って受ける試験、ラテン語での入学式、チューター制度を引き継いだアドバイザー制度などなど、MBA コースではありながらオックスフォード大学の伝統と格式を受け継ぐオックスフォード MBA はまさにイギリス留学という名前にふさわしい日々でありました。一度しかない人生の中でイギリス、オックスフォードで時間を刻めたことに感謝を申し上げます。



◆ ビジネススクール

MBA と聞くと、利益の最大化を追求するというエゴの塊のような印象をお持ちかもしれません。しかしながら自分が求めているものは“正しいことを正しくしたい”という欲求であり、ビジネスというものが社会において強い影響力を持つという事実を考えた際、正しくビジネスを社会のために行うことが重要ではないか、そのためのツールとして MBA というものを学ぶことは、目的と手段を履き違えずに社会に貢献できる方法ではないかと考えました。つまり利益もファイナンスもマーケティングも戦略も MBA も手段であり、目的はそれぞれの組織行動を通した make the world a better place で良いと思うのです。



オックスフォード大学のビジネススクールは“educating leaders 800 years”というフレーズに代表されるように数世紀に渡る世界の最高学府オックスフォード大学の理念を継承し、さらに現代社会の諸問題解決に必要な実践手段へと昇華させている場所であり、Skoll Centre for Social Entrepreneurship(社会起業研究所)や The Institute for Science, Innovation and Society という社会問題研究所を備えるビジネススクールです。



1年制の MBA コースであり1学年 233 名、平均勤続年数 6 年、国籍 50 カ国のインターナショナルなクラス構成でした。数々のグループワーク、講義、ケーススタディ、セミナー、試験、参考文献、プロジェクトワーク、インテンシブなコースではありましたが、世界中から集結したクラスメイトと切磋琢磨し、自分自身を見つめ直し、今後を設計していくために大変有意義な時間となりました。



◆ “Learn from tradition and history, go beyond my comfort zone, and create new paradigm.”

最後となりますが再度 BCJA に感謝の意を表したいと思えます。知識だけでなく経験という側面から自分の人生にとって大きなインパクトをもたらしたイギリス留学。その留学を BCJA が後押ししてくれたことに心より御礼申し上げます。まだまだ未熟であり今後も学ぶべきことが多々ございますが、BCJA 奨学生として英国留学を通して身に付けたことをしっかりと持ちながら、今後も邁進致します。

(2008 年度 BCJA 奨学生, University of Oxford, Business Administration)

2008 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

経済学のメッカにおいて、あえて環境を学ぶ

碓井 健太

私が BCJA から奨学金を頂いて留学したのは、ロンドンにある London School of Economics(LSE)という大学です。オックスフォードやケンブリッジほど日本では知られていませんが、経済学のメッカとも言える大学です。LSE の卒業生は、経済政策、金融業界などで働く人が非常に多く、このような分野で働く人にはよく知られています。ですから、今でも「LSE の大学院にいました」というと、「じゃあ、経済学をやってたんだね」とよく言われます。

しかし私が LSE で勉強したのは、環境政策(MSc in Environmental Policy and Regulation)でした。一見イレギュラーに見えるこの選択ですが、これにはそれなりの理由がありました。環境政策とは経済のあり方の見直しでもあること。ロンドンが、温暖化ガスの排出権取引が世界で最も盛んな都市であること。イギリス政府が、「エネルギー・気候変動省」を作るほど気候変動政策に力を入れていること。そして、ロンドンという場が、大学外の人と交流を持てる最適な場であること。これらの選択は間違っていなかったと確信しています。

LSE での勉強は、大変密度の濃いものでした。実は LSE の修士課程における授業期間は非常に短く、1年の中で20週間しかありません。しかし、その中での議論、文献購読の数は、学部4年分を超える量でした。また、読むものは最近出版された論文、報告書などが多く、学生にも最新の議論を学ばせるという意欲が感じられました。また、授業と平行して行われるセミナーでは、学生主導による活発な議論が行われました。

4月には授業が全て終わり、2ヶ月の試験勉強期間に入りました。この期間は皆図書館や家に籠もり、学期中の復習、スタディグループ、模擬試験の練習などに入ります。私のプログラムでの試験は全て論述問題で、正解はなく、深い洞察力、構成力、主張力などが求められます。また、制限時間内にペンで書くため、若干の手の筋力も求められます。アルファベットの速記になれている国の学生たちと比べ、私は書くのが遅く、不利であったことは否めません。しかし、何とかクリアすることができました。

最後の難関は修士論文でした。試験が終わってゆっくりする間もなく、すぐに修士論文の執筆に入らなければなりません。2ヶ月半で修士論文を執筆するのですから、かなりの突貫作

業です。また、私のプログラムでは1次資料(インタビューやアンケート調査など、自分の手で集めたデータ)を使うことが奨励されており、学生はそれぞれ世界各地に散らばり、おのおの研究を行いました。カナダの水源管理、香港企業の企業社会責任、グアテマラの亀の卵の経済分析、ルワンダのエコツーリズム、など、実にさまざまなテーマの論文が生まれました。

私はフィールドワークをインドで行い、京都議定書におけるグリーン開発メカニズム(CDM)プロジェクトが地域住民に与える悪影響について修士論文を執筆しました。気候変動に関する関心が高まるなか、途上国における温暖化ガス排出プロジェクトが増加しています。その中には、温暖化ガスを削減するものの、別の環境汚染を作り出したり、地域住民の強制移住を強いるものもあります。私の論文は、インドにおける廃棄物発電のケーススタディを通じて、そのような負の影響のあるプロジェクトを防ぐにはどのような国際的枠組みが必要か、を論じたものです。インドのデリーにおいて、現地NGOやジャーナリスト、企業の人々にインタビューを行い、資料収集を行いました。途上国でフィールドワークを一人で行うのは初めてだったので困難もありましたが、総じて大変いい経験になったと思っています。途中でひどく体調を崩し、数日寝込む結果となりましたが、目的は達成することができました。

学業の他にも、いくつか新しいことに挑戦してみました。12月末に、ロンドンで開かれた模擬国連という活動に参加し、ヨーロッパの学生達と国際問題について議論を戦わせてきました。ヨーロッパ中から集まった学生と議論する機会はなかなかないので、大変いい経験とつながりを得ることができました。

また、5月にドイツのボンで開催された、気候変動交渉の作業部会に参加しました。これは誰でも参加できるものではないので、偶然知り合ったジャーナリストの人の厚意によって、記者団として参加できたものです。2009年12月にコペンハーゲンで行われる気候変動交渉に向けての作業部会で、国際交渉を生で見ることができ大変貴重な機会となりました。幸運なことにここで知り合ったNGOの方を以後お手伝いすることになり、修士論文に有用なコンタクトを提供していただけるなど、大変お世話になりました。



今私は、パリにある経済開発協力機構(OECD)にてインターンシップをしています。開発協力における環境配慮を扱う部署の仕事で、途上国におけるグリーン成長に関する分析など大変面白い仕事をさせて頂いています。インターンを始めて、LSE で学んだことが最近議論と直結しているかと言うことを実感しています。大学で学んだことはすぐには役に立たないこと

が多いと言われますが、LSE の実用性を重視した教育はここで実を結んでいます。

このような充実した留学は、さまざまな方々からのご支援がなければ実現しませんでした。温かいご支援を頂いた BCJA の皆様に、心より御礼申し上げます。

(2008 年度 BCJA 奨学生, London School of Economics and Political Science, MSc in Environmental Policy and Regulation)

2008 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

LSE で国際関係史を学ぶ

大久保 明

BCJA の善意ある奨学金に助けられ、LSE で一年間の留学生生活を終え、国際関係史学修士 (MA in History of International Relations) の学位を取得することが出来ました。この場を借りて御礼申し上げます。

国際関係史を学ぶ上で、ロンドンの中心にある LSE は理想的な環境に位置しています。The National Archives や British Library のような資料館に地下鉄一本でアクセスでき、Charing Cross Road に代表されるような書店街にも徒歩で簡単にアクセスできます。イギリス政治、外交の中心地、ホワイトホールは僅か徒歩 10~15 分程度、自分の研究に登場する歴史上の人物が歩んだ道、重要な政策決定を下した場所の空気を味わいながら外交史、国際関係史を学ぶほどの幸せはございません。また、イギリス最大の社会科学系図書館と評される LSE 図書館のみならず、ロンドン大学図書館 (Senate House Library) や SOAS の図書館も利用でき、巨大な大学連合であるロンドン大学のリソースをフル活用することが可能です。

寮に関しても、留学生に優先的に配分されるので、早めに申し込みれば滞在先に困るようなことは有りません。安価な賃料でロンドンのゾーン 1 に住むことが可能です。私は Bankside House と Butler's Wharf という二つの寮に住みましたが、後者の寮が特にお勧めです。値段が安いにもかかわらず、タワーブリッジ周辺のとてもトレンディなエリアに位置し、学校近辺まで RV1 というバスですぐ着きます。フラットになっているので友達も作りやすいです。



LSE の国際関係史マスターコースは例年 60~100 人程度の学生が集まる比較的大きなコースです。国際関係史学部は世

界でも近現代史の分野でトップクラスの教授陣を備えており、歴史と伝統ある非常に優れたコースを提供しています。コースメイトも皆優秀な人ばかりでした。歴史学ということもあり、他のコースと比べ英語力はネイティブに近い人が多かったです。私もこの一年間、苦勞しつつもコースワークに追われることで書く力がかなり身についたと実感しています。

現在の LSE は国際関係論 (International Relations) コースのほう有名かも知れないですが、歴史的なアプローチに興味があるのであれば国際関係史を選ぶべきかと思います。LSE に限らず、イギリスでは政治学、国際関係論、歴史学、安全保障学などの学問領域の境界線ははっきりしており、それぞれ独自の学部を持っているケースが多いので、自分の興味関心を予め明確にする必要があります。LSE では、他学部の講義を聴講することが許されているので、広い知的欲求を満たすことも十分に可能です。私も隣接分野の国際関係論の講義をいくつか毎週聴講しました。

また、LSE は、パブリック・レクチャーと呼ばれる、学外の方でも聴講できる世界中から第一線で活躍する研究者や活動家、政治家などを招待する講義が非常に充実しています。記憶しているだけでも私の滞在中、ロシア大統領メドヴェージェフ、社会学者ウルリッヒ・ベック、投資家ジョージ・ソロス、国際関係史関連の分野からはザラ・スタイナー、デヴィッド・レイノルズ、ニール・ファーガソンのような有名人が毎週のように訪れています。LSE 生に限らずロンドンに滞在される方はチェックしてみることをお勧めします。

私は大学を卒業してすぐ LSE のマスターコースに進学しましたが、その決断をして本当によかったと思っております。イギリスの大学院は授業ごとに当該分野の重要文献・資料に関する膨大なリーディングリストを配ってくれるなど、システムティックに研究の基礎を徹底的に叩き込んでくれます。現在は元の大学に戻り、大学院生として研究生生活を歩み出しておりますが、LSE で一年間は本当に代え難い貴重な経験となりました。またいつか何らかの形でイギリスに留学できればと考えております。

(2008 年度 BCJA 奨学生, London School of Economics and Political Science, International Relations)

2008 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[5]

ロンドンでの言語学

瀬楽 亨

私は、2007 年 9 月から 2008 年 9 月まで、University College London (以下、UCL) の修士課程で言語学を専攻していました。まず、この留学を支援して下さいました BCJA の皆様に、心より御礼を申し上げます。本稿では、UCL での研究面と生活面に分けて、留学生活をご報告します。最後に、私の近況について述べることで結びとします。

1. UCL での研究

私の専門領域は言語学ですが、特に関心を持っているの

2009年度BCJA会計決算報告書

2008年11月1日～2009年11月20日

は語用論 (pragmatics) と呼ばれる分野です。語用論と一口に言っても様々な分野があるのですが、私の研究関心を一言で言ってしまうと、「私たちが持っている言語知識は、実際のコミュニケーションで、どのように使用されるのか?」というものです。私がUCLを留学先として決めた理由は、語用論を専門的に研究できる環境が整っていたためです。(UCL以外にも、King's College Londonなどの他大学の講義にも積極的に参加しました。本稿のタイトルが、「UCLでの言語学」ではなく、「ロンドンでの言語学」となっているのは、そのためです。)

UCLのカリキュラムは、最初の半年間は主に講義が中心で、残りの半年間はテストと修士論文の執筆が中心でした。講義がある時期は、講義の予習とその復習が生活の中心になっていましたが、時間を見つけて、私自身の研究も進めていきました。最も刺激的だったのは、やはり、修士論文を書いている時期です。私は二人の先生から論文指導を受けましたが、その先生方との議論を通して、論文執筆の過程を本当に楽しむことができました。UCLを卒業した今でも、その先生方からは非常に有益な助言を頂いています。UCLで学んだ事は、私が今後研究をしていく上での非常に大きな糧になったと確信しています。

2. UCLでの生活

私は、イギリスに留学する前は海外経験がほとんどありませんでした。そのため、イギリスに到着した瞬間の感動は今でも思い出されます。ところが、実際に生活をするようになって、色々トラブルに遭遇しました。特に、今となっては笑い話ですが、イギリスで銀行の口座を作った際にはなかなか思うように事が運ばず、口座開設までに数ヶ月もかかってしまいました。しかし、このようなトラブルにも関わらず、ロンドンでの生活は実り多いものでした。私は学生寮に住んでいたのですが、寮生活を通して様々な国の人と知り合うことができました。日本人の友達は少なかったですが、「戦友」としてお互いに励まし合い、時にはパブで語りあうこともありました。また、貴重な文化遺産やイギリスの大自然に触れ、その壮大さに圧倒されました。さらに食生活についてですが、私の場合は寮で食事が提供されました。金曜日の夜はフィッシュアンドチップスが出るので、毎週楽しみにしていたものです。週末は食事が出ないので、寮のキッチンで(苦手な)自炊をしていました。一年間の留学生活はあっという間に過ぎてしまいましたが、ロンドンでの生活はとても素晴らしいものでした。当時の友人たちとは今でも連絡を取っています。思い出話が尽きることはありません。

3. おわりに

UCLを卒業後も、私は言語学の研究を続けています。研究関心が多少変化したこともあり、現在はUniversity of Oxfordの博士課程に在籍しています。しかし、週に一度はロンドンを訪れ、UCLやKing's College Londonで講義を受講しています。BCJAの奨学生であったことを誇りに思い、今度はOxfordで研究を精一杯進めていきたいと思えます。(2008年度BCJA奨学生, University College London, 言語学)

(一般の部)

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	¥1,106,324
会費	¥188,000
利息	¥157
借入現金	¥13,727
合計	¥1,308,208

支出の部

科目	金額
案内状印刷代	¥79,800
封筒印刷代	¥53,370
事務用品代	¥2,785
メール便代	¥99,840
郵便代	¥2,420
ケーティング代	¥156,870
振込手数料	¥1,050
交通費	¥160
Webサイト維持料	¥52,794
アルバイト料	¥35,000
合計	¥484,089

2009年11月20日現在の資産状況

銀行口座残高	¥824,119
借入現金	¥13,727
次期繰越	¥810,392

(BCJA奨学基金の部)

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	¥607,922
郵便振込	¥965,000
利息	¥131
借入現金	¥4,140
合計	¥1,577,193

支出の部

科目	金額
奨学金支給	¥1,200,000
振込手数料	¥6,720
アルバイト料	¥70,000
合計	¥1,276,720

2009年11月20日現在の資産状況

銀行口座残高	¥300,473
借入現金	¥4,140
次期繰越	¥296,333

2010 年度 BCJA 奨学基金趣意書

2009 年 3 月 7 日

BCJA 会長 横川信治

BCJA 会員のご好意で、昨年度も 8 名の新進気鋭の留学生が、英国において、勉学にいそしんでおります。大変な難関から選抜された有為な人材であり、必ずや大きな成果が期待できるものと信じております。

今後も、貴重な英国留学の道を確保するため、またこの留学制度に期待している若い諸君に希望を持ち続けていただくため、会員の皆様から、今回も、広くご賛同を賜りたいと願っております。

前回に引き続き、今年度も、より多くの会員の皆様からご賛同を得たいものと、郵便振込でのご送金とします。

みなさまからのご厚志を心からお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいませようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関しては Newsletter にて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男 秘書 川崎

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-5

20 山京ビル 602 号 (株)ビーユー

連絡先 Tel:03-5211-3855 Fax:03-5211-3858

e-mail:info@be-you.co.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード:9900

店番: 019

店名:0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先: ビーシージェイエー(BCJA)

2009 年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧

2009 年 11 月現在

協賛者総数 69 名 総額 965,000 円
派遣者数 8 名 奨学金総額 1,200,000 円

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

安藤 仁介	佐藤 嘉明	中山 修一
池上 忠弘	塩田 洋	西村 閑也
石井 明	白川 正男	能口 盾彦
石渡 淳一	菅井 直介	野城 真理
稲永 清敏	杉浦 和朗	橋都 浩平
井上 公正	杉下 守弘	原川 博善
江本 進	須田 英明	藤田 道也
大野 公男	田尾 憲男	古川 宣明
岡井 清士	高柳 和夫	古田 一雄
岡村 定矩	田口 博國	町並 陸生
小倉 暢之	武内 重二	三浦 省五
金山 弥平	田中 晋	村井 康久
川本 敏	田中 利彦	森 亘
北 政巳	田中 典子	森田 青平
北川 正信	田中 亮三	矢島 直子
木村 精二	田中 彌寿雄	山口 隆美
木村 浩	玉井 俊紀	山下 純宏
河野 豊弘	田村 一郎	山田 昭廣
河本 直紀	塚原 重雄	山田 和廣
小鍛冶 繁	津山 直一(千鶴子)	横山 昭
齋藤 友博	床尾 辰男	横山 俊夫
齋藤 文良	中井 晨	吉田 幸子
佐藤 修二	中島 章	吉田 徹夫

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧(プリントアウトが可能になりました)、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(電子メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)

Yahoo!グループ[bcja]のご利用案内

Yahoo!グループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Yahoo!グループの中に BCJA 会員専用グループ

として、[bcja]グループを新規に設定いたしました。既にメンバー登録を開始しております。登録を希望される方は、下記の URL にアクセスして下さい。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja>

電子メールのアドレスをお持ちでない方、また、個人、会社のアドレスでは何かと不便な方は、yahoo の電子メールアドレス(旅先などで共用 PC から簡単にアクセスできます)が新たに取得できますので、そのアドレスをお使い下さい。



[編集後記]

BCJA ニュースレター26号では、BCJA 会長就任のご挨拶、前会長退任のご挨拶、BCJA 英国留学奨学金 2009 年度選考結果報告、年次総会報告、2003 年度、2005 年度、2007 年度、2008 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの留学報告 8 件、会計報告、2009 年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

編集部では、編集作業について、お手伝いいただける方を募集しております。ご希望される方はぜひ下記連絡先までよろしく願いいたします。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容をについて、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、会計担当の島津様、川崎様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)

